

分科会1 第1学年

内容項目：D-(20) 自然愛護

教材名：「ぼくらの村の未来」

授業者：尾道市立向東中学校 教諭 子川 春子

司会者：三原市立第二中学校 教諭 北村 桃香

記録者：三原市立第二中学校 教諭 河野 陸

指導・助言：広島県立教育センター 指導主事 松野 志保

1 授業について（授業者より）

振り返りとして、「自然」を選ぶか、「便利さ」を選ぶかというところで、生徒の意見は「自然」によると思っていたが「便利さ」が想像以上に多く驚いた。生徒同士の対話を通して意見の変容があるとは考えていたが、うまく「自然」の方に行けていなかった中での中心発問だったので、不安だった。

生徒に向島の海を思い浮かべさせる切り返しをもっと早く出させたらよかったというのが反省点としてある。キノコを「自然」というには生徒からすると少し想像しにくく、「向島の海がコンクリートだったらどう？」という、切り返しをもっと早い段階で行っていたら、もっと身近に考えられていたのではないかと思った。

中心発問では「自然」に寄ってきて、生徒同士が対話する中で、「結局人間は自然の中で回っている」という意見など、予定していた意見が出た。しかし、「自然は家族」という意見に対して、どうしてそう思ったのかをもっと聞ければよかったと思う。

最後の「向島の海、身近な自然とどのように生きていきたいか」というところで、「自然を家族・仲間のように思う」や、「ボランティアなど、自分たちにできることをする」という意見が出ることを目的にしていたので、出てよかったと思うが、もう少し踏み込み、「自然に感謝する」という意見や、「人間は自然の一部である」というのも出たらよかったと思う。

2 質疑応答

質問：中心発問の「私たちが自然と共に生活する上で心に持っておきたい考えは何だろう」について、私は話し合いをさせる時に、先に自分の意見

を持たせる時間をどうしても取ってしまうが、今日は無いままにスタートした。子どもたちはスムーズに話し合いができていたと思うが、どうしても先に考えると誰かの意見にまとめてしまったりするため、どうしたら、子どもたちがスムーズに、自分の意見を考える時間がなくても話し合いができるようになるのか、日頃の実践等を教えていただきたい。

回答：いつも道德の授業では個人の意見を書かせる時間は取っているが、今日は初めの生徒同士の対話に時間がかかったため省略した。日頃の行いとしては、毎週水曜日の朝にある「対話タイム」を学校全体で行っている。対話のテーマの内容は様々だが、単純なテーマで行うことで、生徒が自分の意見を出せるような雰囲気は毎週作っているからではないかと思う。

質問：指導案の指導上の留意点に、対話の重点項目の「多面的・多角的に考える」を意識させるや、深めたいワード④、⑥と書いているが、子どもたちは常に意識して授業に取り組んでいるのか。在り方や意義が知りたい。

回答：机の裏に生徒が話し合いの重点項目等書かれた一覧を貼っている。

それを常に、どの授業でも使えるよう机の下に貼っておき、意見が止まってしまったら、「じゃあ何番で言ってみよう」と指示をしている。そのように自分たちで一覧を見て、どんどん質問をし、対話が発展できるよう工夫をしている。

質問：一番最初に動画を見せた後に、気になったことや聞いてみたいことを、生徒に投げかけていたが、最初に「もしみんながこの村にいたらどうしますか」という今回のねらいに迫るような問い

かけが子どもたちから出たというのはすごいと思った。自校の道德のテーマとして、「自分事として考える」や、「子どもに問いを持たせる」をあげ、研究を進めているが、こちらが意図しない部分も出てくると思う。子どもたちに問いを持たせ、発問にすることは今までにもしており、子どもたちは慣れているものなのか、これまでの実践も踏まえて聞きたい。

回答：指導案を指導主事と考える中で、生徒が主体的に対話するクラスだから、それを生かして生徒発問をしたら良いのではないかという助言をいただいた。したがって、二学期の初めからどの教材においても生徒が気になったことを発問に出して、それについてみんなで考えるということをやまず始めた。意図する問いが出ないこともあるが、どの教材でも、「今日はこのテーマについて考えていく」と最初に伝え、そこに沿っていない発問かどうかは生徒が自分で考えるというスタンスで、二学期から続けている。今日も自分だったらどうするかという意見以外も想定していたが、今日はその意見が出たのでそれで進めていった。

3 協議

意見：協議の柱①について普段の先生の学級経営の良さが本当にたくさん見られた。不規則発言など、子どもたちが自由に発言する場面もたくさんあったが、子どもたちが話し始めたら、それをしっかり聞き、静と動のメリハリもあった。また、どうしても教師主導になりすぎるとなかなか子どもたちの本音が出ないところもあるということをやうまくファシリテートしながら、進められていたと話になった。また、「自分事」というところで、子どもたちが自分の生活体験を基に話す場面があったから教材自体も自分事として考えやすい題材だったと思う。その中で、二項対立にして、お互いに議論させながら深めるところがすごい学びになったと感じた。柱についても、意見交流や最後振り返りで、「自然も大事だけど、やっぱり自分の生活も大事」とか、「バランスを取って」など書けていたので、しっかり着地すべきところに着地していて勉強になった。

意見：「自分事として」という部分については、子どもたちが考えられていたという意見が出た。例えば、最初に海の写真の提示があったと思うが、教材の資料はなかなか自分事として子どもたちが考えにくい部分があり、向島の写真を授業者が提示したことで、子どもたちが自分事として考えるきっかけにつながったと思う。また、「海がなくなったらどう？」と繰り返し発問し、子どもたちに投げかけていたことで、中心発問もしやすかったと思うし、「総合でやったよね」という声掛けも、子どもたちが自分のこととして考えることにつながったと思う。指導案の中の17ページの上、「どちらも共通して自然は守りたくないとは思っていない」ということが、書かれてあるため、「賛成派も反対派も共に自然を失いたくないわけではないよね」ということを、授業者からもうひと押しあると良かったという意見もあった。その他にも、道徳的価値についての話も出て、今回自然愛護だったが、相互理解や生命の尊さなどにも繋がっていくという意見があり、自然愛護だけだと、なかなか難しい部分もあるため、複数合わせるというのも良いのではないという意見が出た。協議の柱②については、対話が対立しない雰囲気がとても良いと思い、普段の先生の学級経営がしっかりされているのだと感じた。ここがそういう意見だったら、自分もこういう意見に変えてみようとか、前向きに話し合いができていたと思う。

自己の生き方については、賛成派反対派の対話に時間がかかったのもあり、自己の生き方についてしっかり考えるという部分は、もう一息だったのではないかという意見が出た。

意見：グループで話した協議の柱①のところで、生徒の意見で対話が進んでいてねらいからはずれていなかった。最初は「自然」が少なかったが、押しつけるのではなく「自然」に行ってほしいところ、両方の賛成意見も反対意見も受け入れながら、「自然」について考えさせることができていたところが素晴らしいと思った。「向島の海がコンクリートだったら？」という切り返しのタイミングも良かったと思った。

協議の柱②の方では、ホワイトボードを活用し、

班で話し合うことができている、どちらかではダメだという意見を持つ生徒が増えていたため、共存という言葉が子どもたちの中に落ちていったと思った。また、話し合いがスムーズにできていたのは、司会・発表・タイム・書記という役割が決まっていたため、子どもたちが見通しを持ちやすかったのだと思った。

最後の振り返りのところまで子どもたちの考えを持っていくにはどうしたらいいのかと考えた時に、最初に提示したアンケートの「自然環境が損なわれないよう、意識的に行動しているという」の「意識的に」というところをもう一度子どもたちに聞くことで、深いところまで入れたのではないか、という意見が出た。

意見：授業全体を通して、子どもたちが安心して、何でも自由に発言している環境が整っていて感動した。それは一小一中として同じ人間関係で、先生方の子どもの関わりや認め合う環境づくりが昔から整っているから、対話タイムだけでなく授業に出ていたのではないかと思った。

協議の柱①は、結果的にはねらいにしっかりと迫っていて、すごいと感じた。中心発問の「心を持っておきたいことは何か」と聞きがちなところを、「考え」というように絞ったことで子どもたちも考えやすくなっていたと思う。

子どもたちの意見の中で、「ゴミが捨てられていたら嫌」という意見に対して「なんでゴミが捨てられていたら嫌なの？」というように聞き返して深掘りすることで、より自然の素晴らしさに気づいて、ねらいに迫れると思った。

協議の柱②に関しては、子どもたち同士でいろんな意見が出ていたので、広がったり深まったりできていたと思う。最後の発表の時に「バランスが大事」ということを言っていたと思うが、やはり便利のところも大事だし、少しは自然を壊さない、という気持ちもその子の中にはあったのではないかと思っていて、そこを認めてあげるっていうのも大切だと思った。

4 指導助言

「生徒が道徳的価値を自分のこととして捉えることができる」手立てが授業の中に意図的に設定されていた。

導入では、生徒にとって身近な向島の海に着目させたり、総合的な学習の時間での取組とつなげたりして、本時のテーマ「自然と共に生きるとはどういうことか。」が身近な課題であることを生徒に自覚させていた。また、展開では、生徒たちは教材を基に対話をしていたが、教材の中だけのことになってないかな？と思うような場面で、すかさず「向島の海だったらどう？」と問いかけていた。これらの意図的な手立てはすべて、生徒たちが「自然愛護」の道徳的価値を自分のこととして学び深めることにつながっていたと思う。

「物事を広い視野から多面的・多角的に考える」ための対話が設定されていた。

本時の授業の対話の場面は大きく2つ設定されていたと思う。1つ目は展開前段。教材に対して「気になったこと」や「疑問に思ったこと」を問うことで、生徒から「もし、みんながこの村にいたらどうしますか？」と問いが出て対話が始まった。生徒たちは、賛成と反対で様々な思いや考えを語っていたが、その中で何度も揺れ動いていた。この対話の良さは、二項対立のみで終わらずにどちらの思いや考えにも共感しながら考えていたところである。賛成か反対を決めたいのではなく、どちらの意見も分かるよね、自然は大切と分かっているけれども便利さを求めてしまうよね、という他者理解や人間理解、そして価値理解を深めていくことが大切である。本時の生徒たちは、「どうして？」「でも…」と深めたいワードを使ってたくさん対話することで、結果、「生命尊重」や「思いやり・感謝」「相互理解」などの道徳的価値に触れながら、教材の内容を基に多面的・多角的に考えていた。

そして、2つ目の対話は中心発問の場面だった。ここでは、グループごとにホワイトボードを使っての対話だった。生徒たちは、これまで対話してきたことを踏まえて、グループで

出た意見に価値付けしながらまとめていた。

この2つの対話は、どちらか1つでは成り立たない。広い視野から多面的・多角的に考えていたからこそ、生徒それぞれが大事にする様々な道徳的価値を関連付けながら、「自然と共に生きる」ということに深く迫っていくことにつながっていた。

「自己の(人間としての)生き方について考えを深める」ための問いの設定がされていた。

時間をもう少し確保し、じっくりと考えさせたいところではあったが、1時間を通して、生徒たちは「自然愛護」を他人事ではなく、自分事として捉えながら、これからの生き方につなげていた。それは、「自然と共に生きるとは」「私たちが心にもっておきたい考えとは」「身近な自然と共にどう生きていきたいか」といった問いが設定されていたからである。生徒たちは「自然にも命があること」「自然があるから人間も生きていけること」「世の中は人間だけのための世界ではないこと」などを考えながら、「これから自分たちにできることをしていきたい」と言っていた。きれいごとにも聞こえるかもしれないが、確かに自分たちの身近なこととして捉えていた場面が見られた。このことを語るときにある生徒が「例えば、これが向東の海だったら…」と自分の思いや考えを話し始めた。あの場面で、より一層生徒たちは身近なこととして本時の授業が心に落ちていったと思う。

ここまでの3点は、授業者が、学習指導要領解説を丁寧に読み解きながら考え、ねらいとする道徳的価値について自覚を深めていかれたからである。私たち教師は、生徒が「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めることができるよう、実態に応じた指導をしていくことが大切である。

このことを、授業者がしっかりと意識し、授業に臨まれたからこそ、今日の生徒たちの姿だったと思う。

今後に向けて現在、次期学習指導要領改訂に向け中央教育審議会が行われていることは御存知

かと思う。平成27年3月に「特別の教科 道徳」と位置付けられ、10年経った。この10年間、「考え、議論する道徳」への質的転換を図るため、先生方には授業改善に御尽力いただいているところである。今後より一層、生徒一人ひとりが道徳的諸価値について主体的に自分との関わりで捉え、対話を通して多面的・多角的に考え、教師の明確な意図により「深い学び」へと向かうため、特に「対話」の充実に御尽力いただきたいと思う。ねらいとする道徳的価値について、生徒が思わず話したくなる、みんなの考えを聞きたくなる、そんなテーマや問いを設定していただけたらと思う。

